

そうじいもの

佐々木ひろあき

●受賞のことは

受賞の連絡をいただいたとき、嬉しさと同時に、時間を割いて読んでいただいた方々に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。締切の直前になって、急に「書こう!」と思って、記念受験だ!とばかりに勢いで応募してしまったからです。そんな作品を最後まで読んでいただき、また、選んでいただけただけで、本当に嬉しく思います。競馬と競馬に関わる全ての人に感謝です。

●プロフィール

1983年、京都府生まれ。カネツクロスのかつこよきに惚れて、競馬にはまりました。和田騎手が再びG1を勝つまで、応援し続けることが我が家のきまりになっています。

「シゲルキハダマグロやな」

嫁が隣で言う。単勝オッズは100倍を超えている。15番人気。来るはずがない。でも、嫁が言うので、PATで複勝100円を買う。

「絶対ないと思ってるやろ」

嫁がいじわるそうに笑う。その顔を見るのが好きだ。直接は言えないけれど。そして、こんな風に2人で競馬ができるのが本当に楽しい。今年の7月くらいから、嫁が競馬と一緒に見てくれるようになった。新しく買った50インチのテレビで、2人でパドックを見ながら予想する。最初は、3番人気とか5番人気とかそれなりに来そうな馬だったのに、嫁はいつしか10番人気以下の穴馬を見つけるのにすっかりはまってしまった。

シゲルキハダマグロの馬券は買ってしまったので、僕はカレーを作ることにした。平日は嫁。土日は主に僕がご飯をつくる。しばらくして、嫁の叫び声と、「これどうなん」という声が聞こえた。テレビをのぞくと、4頭くらいの馬たちがゴールにかたまって入っていた。そこに、シゲルキハダマグロがいた。スロー映像が流れる。

「3着に来てるなあ」

その映像を見て僕が言う。

も、そう母が言った。そして、僕は嫁との結婚に向けて、動いた。

すると、すると物事は動いていった。弟を、行政の支援センターに連れていくと、次回のカウンセルングの日や、職業訓練校の手続きなど、弟が外に出るための動きがすぐに決まった。弟は職業訓練校に行くことになった。不安だったが、「競馬が話せる人がいてすぐに仲良くなった」と楽しそうに話してくれた。競馬すげーなと思った。3年引きこもりをしていたのがウソのように、競馬仲間がいたことで、弟は真面目に訓練校に通い、資格を取った。そして、いくつか内定をもらい、今はだれもが知っている企業に就職した。弟が就職してから、僕は、母を競馬場に連れていくようになった。弟が就職した年には2人で京都競馬場へ行った。日本ダービーを大スクリーンで見ると、

「うちはもう蛭名なんや」
母は嬉しそうに、バスで話してくれた。
「でも、サトノダイヤモンドも強いやろ。マカヒキはどうや」
「強い。皐月賞は、ディーマジエステイがあんな脚使うと思っただけやろうしなあ」
「ほな、デムーロはないか。怖いで」
「そう思うんやったら、リオンディーゾも買ったらええやん」
「でもなあ、買い目が増えたら申し訳ないやろ」
競馬場に行くとき、僕は、母に5000円プレゼントする。たいした額ではないのに、母はそれが減らないように真剣にこの1週間予想してくれたらしい。

「ダービーは、競馬のお祭りなんやし、気にせず、買ったらええねん」
明日のことを心配せずに、日本ダービーが見られるのは、4年ぶりのことだった。赤いペンで印がいつぱいの母が持つ大スポを見る。少しだけ涙で目が滲んだ。あのつらかった時期を本当に脱したのだと思った。

「やろ。嫁ちゃんの馬を見る目を馬鹿にするなよ」
複勝2520円ついていた。

「私、すごい」

そうはしゃぐ嫁を見ていて、自分はいま、とても幸せなんだと思う。口には出さないけれど、

嫁とは結婚して、3年目になった。中古だけれど、家も買った。まだ、子どもはいないけど、普通に幸せな家庭だと思う。そこまで来たとき、また、こんな風に競馬を楽しめるとは思わなかった。僕たち夫婦が結婚する直前まで、弟が引きこもりになっていた。ほぼ3年のあいだ。父ががんでなくなり、弟は会社でも有数の営業マンだったけれど、トラブルに巻き込まれて退社に追い込まれた。父の死と、トラブルと、そのせいで負った借金と。弟は社会に出られなくなってしまった。父の死で傷ついた母と、引きこもりになってしまった弟と、僕はいつべんにも見るようになった。

弟の借金を返しながらの生活は大変だったけれど、我が家には奇妙な明るさがあった。それが競馬だった。借金を抱えた引きこもりな弟を交えて、毎週、競馬の予想をするのだ。出資者は僕。余裕があるときは、母と弟に1000円ずつ買っていいといい、余裕がないときは、ウイン5の100円だけ。といったように、

「あんたは誰なんや」
「エアスピネルかなあ」

「来るかあ。もう、勝負付けは済んでるやろ。いくら武でも厳しいんちゃう」

おっしゃる通り。とても、60を超えた女性の台詞ではない。散々、バスでは、悩んでいたのに。結局、母は、サトノダイヤモンド、マカヒキ、ディーマジエステイの3連単のボックス。サトノダイヤモンドとディーマジエステイの3連複2頭軸相手総流しという馬券を選択した。取って損になる可能性も高い。が、5000円がゼロになる可能性も低い馬券。もともと、母は、本命党だった。この数年ですっかり、僕のお金を減らさない買い方が身につけてしまった。それが今は悔しい。でも、いいのだ。また、これから自由になっていけばいい。

僕は武騎手のエアスピネルの単勝500円を買った。母と座れるところを探す。でも、ない。思った以上に、京都競馬場には人がいた。仕方なく手すりにもたれながら、観戦することにした。子供のようには、2つの馬券を握りしめて母が嬉しそうに大スクリーンを見ている。

「うちな、蛭助に勝ってほしいんや」
僕の家では、困ったら、蛭名騎手を買う。いつの間にか、我が家では、蛭名騎手は蛭助と呼ばれている。

「まだ、ダービー勝ってへんもんなあ」
この時、ふと父のことが思い出された。父にも欲しかったのに手に入られなかったもの。やりたかったのに、できなかったこと。僕たち家族のせいではない。いいあったんじゃないか。こんな風に、ダービーで、好きなだけ馬券を買っていうのもそうかもしれない。買ったなら、今、生きている人には欲しいものを手に入れてほしい。なんとなくそう思った。蛭助を応援しよう。僕は思った。

日本ダービーがスタートすると、一気に、スタンド

毎週、僕たちは、馬券は買っていた。僕も、母も、弟も、口にはしなかったけれど、1日1日がつらかった。でも、馬券を考える一瞬、そのつらさを忘れられた。秋競馬では、回収率1位の人に、有馬記念で5000円の馬券代を託そう。みたいな企画もやった。怖かったのだと思う。未来の約束をしないと、怖かった。大げさだけど、弟が命を絶つんじゃないか、母が弟を刺すんじゃないか、何もかも捨てて、僕が逃げ出すんじゃないか。家族の誰かが3年という期間、引きこもりになると、いろんな思いが生まれる。もちろん、僕にも。仕事でつらいことが重なると、家族と、その時、付き合っていた今の嫁と、もう全部捨てて、違うところに行こうか。何度も思った。でも、踏みとどまれた。たぶん、競馬があったからだと思う。

毎週、日曜日に僕は嫁の1人暮らしの部屋に遊びに行っていた。その送迎は、弟が車でしてくれる。その車の中で、競馬の予想や反省会、騎手や血統の話、いろいろ話した。この時間が、とても楽しかった。だから、いろんな思いはあったけれど、踏みとどまれた。弟が引きこもり3年目に突入したある日、母が言った。「もうそろそろ結婚し」
弟の引きこもりはなんの解決もしていなかった。で

は静かになる。「まだや」そのまま「おっさんたちの声はたまにする。最後のカーブがやってくると、おっさんたちに混じって、いろんな人の声がする。「いけ」「差せ」ひと際大きく、「武ー! そのままー!」一旦、先頭に立ったエアスピネルに、おっさんが叫ぶ。僕たちの周りで笑いが起こる。その一瞬、サトノダイヤモンドとマカヒキが飛んできた。遅れて、ディーマジエステイ。届け! 蛭助!
競り合う2頭に追いつけず、ディーマジエステイは3着だった。

「蛭助、あかんかったなあ」
馬券を的中させた母が残念そうに言う。

「また、来年、応援しよ。ほな、換金してくるわ。みんな当たってるし、ちょっと時間かかるなあ」
「そのお金で、嫁さんに、ケンタッキーでも買ってあげて」

「せやな」
その日、5000円の半分ははずれ馬券に、当たった分は、嫁のケンタッキーになった。

あのダービーから、1年後。まったく、競馬に興味があつた嫁が、僕の横で競馬予想に励んでいる。土曜、日曜と、僕の家は競馬場になる。

不思議な気持ちになる。競馬は楽しい。だけど、楽しいだけじゃない。ずっと見ているから、嫌なことと一緒に思いたす。それでも、たぶん、競馬を見続けるんだと思う。義務とか、趣味とかでもなく、そういうもの、という感じで。新しい家族が増えても、年をとっても、きっと、僕は競馬を見る。それは、もう、そういうものだから。

嫁が僕を見ている。さあ、今日はどんな馬の複勝を買う?

「今日の、最終は、コパノデイルやな」
11番人気ですか……。

